

野中哲照著『後三年記の成立』『後三年記詳註』

久保 勇

野中哲照氏による『後三年記』研究の単行本化（以下『詳註』『成立』と略）は、『後三年記』に関心を寄せる多くの人々に待たれてきたものである。とはいえ、同氏の『後三年記』研究には続きがある。その全体は、平成二十四年度に学位授与された博士論文『文学史的展開からみた前期軍記の研究』を構成するようだが、これから評させていただく二書は第二部『後三年記』の成立年次（『成立』・付篇（『詳註』）に当たるもので、第三部『後三年記』の表現構造）は未発表である。これは『陸奥話記』とのアナロジや「私戦」をめぐる表現等にかかる作品論関係の既出論考から構成されると推され、非常に興味深いものである。以上のような状況のため、両書で注記される既出論考の一部については、しばらくの間初出稿を参照しなければならない。

まず、『後三年記』の研究史的背景と野中氏の仕事について概観しておきたい。『後三年記』の「通説」とは、テキストの成立＝東京国立博物館蔵『後三年合戦絵巻』詞書成立時とし、それを最古と看做すことである。『後三年記』テキストは、『絵巻』残存の後半三卷分詞書に加え、寛文二年（一六六二）板本（奥州後三年記）や群書類従本に収載の冒頭一卷分（絵巻）欠失部）を加えた

ものを指す。寛文二年版は、『陸奥話記』と合綴され『奥羽軍志』（外題）として板行されており、ここから『陸奥話記』と並ぶテキストとして流布し始め、前九年・後三年合戦を伝える軍記として受容され、『前太平記』にも影響を与えてきた。

軍記研究では「初期軍記」に分類され、同分野では笠栄治氏による先行研究（『後三年記校本とその研究』桜楓社一九九二）が唯一まとまったものであった。歴史学研究ではかつて「後三年の役」と称された歴史事象を考究する資料として、また美術史研究では『絵巻』詞書研究として、それぞれ成果が蓄積されている。とはいえ、他の「初期軍記」作品と比べてみれば、テキスト研究が盛んであったとは言えない。一九九〇年代初頭からその状況を少しずつ変えてきたのが、野中哲照氏である。叙上については、拙稿『「研究展望」初期軍記（一九八三年一月～二〇〇五年一〇月）』（『軍記と語り物』四三、二〇〇七・三）を参照されたい。

『後三年記』研究が新たな局面を迎える兆しは、およそ六年前、軍記・語り物研究会二〇一〇年度大会初日（於・秋田大学）の「シンポジウム『後三年記』をめぐる諸問題」の開催にあった。野中氏、樋口知志氏（歴史学）、高岸輝氏（美術史）の三名が登壇され、重厚な基調報告と活発な議論が交わされた。（成果は『軍記と語り物』四七、二〇一一・三）私は進行のみの司会を務めたが、秋田の地で『後三年記』のシンポジウムが開催できたことそれ自体を嬉しく思う、といった向きの発言をした。また同会会員の野中氏のそれまでの仕事なくして、シンポジウムの開催と成功はあり得なかったとも回顧される。その後、東日本大震災を経験した年、被

災地岩手にご勤務の樋口知志氏が『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』（高志書院）を発表され、そして今日、野中氏による二書が発表された。世紀をまたいで蓄積された両氏の『後三年記』研究成果を、まとまった形で享受できることを歓迎すると同時に、「続く研究」が期待される状況となったわけである。研究状況整備という点では、小口雅史氏編「古代北方関係研究文献目録データベース」（法政大学国際日本学研究所HP）も公表され、先行研究の検索も容易になってきた。

研究状況のみならず、『後三年記』受容の状況も情報環境の革新的変化により拡大した。たとえば「e 國寶」（国立文化財機構）により、『絵巻』原本の精細画面の閲覧が可能になった。また楊曉捷氏（カルガリー大学）のHP「絵巻三昧」からは詞書英訳も参照できるようになっている。情報環境さえ整えば世界中からいつでも受容可能である。世界では「日本の武士文化の表象」といった興味関心から閲覧されていると推されるが、この作品が伝える内容（テキスト）の詳細、そしてどのような経緯を以て成立したか、という問題の説明は当然もとめられよう。このように想定されるニーズから、野中氏の研究成果は内外に重要な位置を占めていくと予想される。

前置きが長くなったが、二書の内容について触れていきたい。『成立』を繙き、まず驚かされるのが大書された一文の「はしがき」である。

従来、貞和三年（一一三四）とされてきた『後三年記』の成立年次を天治元年（一二二四）に引き上げる―これが本書の

主旨である。

誠に明解である。「あとがき」によれば、藤平春男氏の「論文でも本でも、その意義をひと言で語れるようであれば……」という教えに基づくという。ただ、本書の主旨は終着点ではなく、「いずれ最終的に軍記文学史を説明すること」を見据えられており、それに「必要な一階梯」（あとがき）という位置にある。

また、体裁にかかる特徴として、全十二章構成の各冒頭に「要旨」と「図解」が示され、重要な論述部分をゴシック体で表記するという工夫が施されている。出版案内には「研究者だけでなく一般の愛好家の読解にも応える」とあり、行き届いた配慮だが、一方で「読み飛ばし」を助長しないかと懼れる。賛否の分かれるところだろう。次にみるように、本書は論の展開上、章立て順に「前から」検討していく必要がある。当面注目する問題の論述部分から読み進めても、結局は前提の論に遡らなくてはならない。

全体は、一九八九年から九五五年までに公表された十本（九章までの）の論考に加え、未発表の新稿（末三章）から構成される。通読しての第一印象は、論のダイナミックさである。これは、冒頭から順に一つ一つ問題（通説）を解消し、得られた成果（次章の前提）を積み上げていく展開方法によるものである。以下は、その成果を積み上げていく段階を私なりにまとめたものである。

①現存貞和本『後三年合戦絵詞』詞書の成立Ⅱ『後三年記』の成立ではなく、『絵詞』「序」に示される貞和三年（一一三四）以前に本文が成立していたこと（第一章）

②本文に増補的な部分を一部認めるものの、それらを含んで最終

的に表現主体（作者と呼ぶうる）が統御し、テキストが成立したと考えられること（第二章、第三章、第九章）

③ 現存しない承安本文は、現存貞和本文書とほとんど変わらぬテキストであったこと（第四章、第八章、第九章）

④ 記述内容の特徴および助詞・助動詞の用例から、院政期（平安後期）成立の可能性が示唆されること（第五章、第六章）

⑤ 敬語（待遇表現）の用例から、本文の成立を一一五〇年以前の院政期初期まで上げうること（第七章）

⑥ 「当国」（四例）の表現分析、清衡の任鎮守府將軍（嘉応二年）の状況等から、院政期初期に陸奥国（平泉）成立が想定されること（第八章）

⑦ 承安本の存在を伝える『吉記』の記述（承安以前の「伝言」が「委不記」には批判の余地があり、陸奥国の状況から相応しいのは清衡存命時（一一二八）以前であり、また「今昔」未掲載等の状況から一一二〇年頃まで成立年次の上限を設定しうること（第九章）

⑧ 『後三年記』は清衡存命時の陸奥国における国家的事業（歴史叙述）とも理解され、天治元年（一一二四）の中尊寺金色堂落慶供養と通底し、それが『中尊寺供養願文』から読み取れる二点の共通位相からも補強されること（第九章、第十章）

⑨ 後出性と捉えられかねない「昔の源氏・平氏」の表現は、『今昔物語集』と『栄花物語』で併称される源満仲と平貞盛を起点とする「兵」のイエ意識に基づくものであり、一一二〇年代成立説を妨げない（第十一章）

⑩ 『後三年記』成立を一一二〇年代とした場合、乱の事象や登場人物の存在自体には虚構がなく、後三年合戦終結から成立当時の史料として有効なこと（第十二章）

「はしがき」にはなかったが、成立圏（成立の場）が陸奥国（平泉）という想定は、天治元年成立説にとって不可欠な条件である。

まず、本書（既発表稿のみ対象）の結論について、樋口知志氏は「私もまた、野中説の結論を支持するものである」と表明されている。樋口氏が支持・補強されている箇所は、右の⑥⑦⑧清原清衡周辺での成立説である（前掲書二五九～二六二頁）。また、美術史研究の高岸輝氏も『絵巻』の再検討から「東博本は承安本をかなりの程度、忠実に写すことで成立したのではないか」という見通しを示しており、絵についても③と通ずることになる（「軍記と語り物」四七）。私も概ね本書を支持するが、板本以前の写本諸本の存在が問題化されていない点（後述）、『吉記』の「伝言」＝『後三年記』の解釈についてはやや疑問を残す。とはいえ、おそらく初出稿以降に出された疑義について、本書ではそれらを想定問答的に解消しながら論述されているため隙がない。ただ、根本的な立場の相違―主に史料の読み―による反論はあるだろう。

かくまでも周到に「読み」による証左を積み重ねられた理由は、およそ二つの「壁」があったからであろう。一つは軍記研究史における成立論の方法、いま一つは史資料に対する向き合い方であったと考えられる。

前者を具体的に言えば、『平家物語』研究で一時期盛んに議論された原『平家物語』の姿、あるいは原作者（像）を想定する成

立論の課題であり、それが一定の限界を迎え、研究史的に終息したのはよく知られている。文学史の書き換えを目指せば、当然成立論に向かう。諸本を多く有する『平家物語』やその他軍記作品では困難な要素が多い。それを『後三年記』ならば可能とされたのは、当初着眼された現存本の語法の古さから、原本⁶たりうる本文を現存本が有すると判定されたからであろう。加えて「この物語はほぼ、ある一個の作者主体ともいへば構想力・表現力の所産である」という見通しを得られ、成立論の「壁」を超えられたのである。第二・三章で論じられた、一貫した表現意識やテクスト全体にわたる表現連鎖といった視点は、軍記研究では「一貫しない」とか「繋がらない」という結果によって、成立事情の複雑さ（本文素材の利用、段階的な成立等）を説明することが多かった。野中氏は、その逆の結果を得る考証を果たし、『後三年記』の成立論を拓いたわけである。

いま一つの「壁」は、『絵巻』にかかる伝承が史資料に記されている以上、それをどう「読む」という問題である。特に、承安本の伝承を記す吉田経房『吉記』、承安本四巻を参看しその全体像を伝える中原康富『康富記』の「読み」は、本書を支える重要な柱である。触れたように、『吉記』が既にあった後三年合戦を「伝ふる言」とは『後三年記』であって、それが詳細でなかったと伝える経房の記述を疑問とする指摘は、かなり大きな前提となる「読み」となっている。

史資料の表現主体に信頼をおくことができるかという問題は、現代の情報社会にも通ずることで、史料への向き合い方―史料と

しての有効性―を見極める手続きは不可欠である。おそらくこの重要性を述べるべく、新稿を用意し、終章に据えたのである。終章前半部は、歴史学研究に対する批判的筆致であり、ややもすると誤解を招きそうだが、著者の主張は人文学のディシプリン（文学研究／歴史学研究）を超えて共有されるべき「読みの力」―表現主体の指向をデリケートに感じ取ること―というところで一貫している。その先に「歴史的発想と国文学的発想との境界を無化し、双方を止揚していく方向性」あるいは「人間の認知（ここいう指向）をも顧慮したメタ歴史学（人文学）の構築」を希求して、『成立』の本編は閉じられる。

『詳註』は前著の三ヶ月後に公開されている。経緯については「あとがき」に尽くされるが、重複を懼れず若干触れておきたい。いわゆる「初期軍記」に分類される作品は、『将門記』『純友追討記』『陸奥話記』『後三年記』だが、昭和五十年代に内二作品の注釈を大成されたのは、梶原正昭氏である。『将門記』（平凡社、東洋文庫二冊）、『陸奥話記』（現代思潮社、古典文庫）は、両作品の新注（小学館新編日本古典文学全集41）が成されてもなお参照され続けている偉業である。また梶原氏には『鹿の谷事件』『頼政拳兵』という「平家物語鑑賞」シリーズ（武蔵野書院）もある。ルビを多く付して原文の読みやすさに配慮され、興味をそる考察をやさしい文体で説かれている。梶原氏両注釈を目標とされながら、一般に向けた読みやすさ（総ルビ等）をも継承して成されたのが、『詳註』といえよう。私は部外のもので何の利害もないが、このような早稲田大学における軍記研究の学問的伝統が縷々継承され、

多くの学恩を蒙っていることをありがたく思う。

同時に、野中氏の研究姿勢にもあらためて敬服する。本文研究の最初の公表（一九九〇）から注釈連載完結（全七回、二〇〇一）まで、誰（出版社）に催促されることなく、自らに課した仕事として注釈を継続するのは容易ではない。普通なら連載を完結した時点で一書とするだろうが、それを急がず、注釈を更新し続けた（三分の二を加筆）のである。

『詳註』の構成は、冒頭に「解説」、第一部「注釈篇」、第二部「本文研究篇」、第三部「欠失部復元篇」である。「解説」からは必要十分な情報を得るが、研究史的経緯についてはいま少しく筆を費やしても良かったかと思う。なお「注釈篇」の問題点については、細かくなるので個々に問題を指摘する機会は別にしたい。また、「欠失部復元篇」についても拙稿（前掲）で述べたことがあるので、それを参照されたい。

ここでひとつ問題を挙げるならば「本文研究篇」となる。最も重要なのは対象テキスト（底本）の選定だが、東博本に欠く第一卷分は、群書類従本が採用されている。先行の寛文二年版と比して大差なく、「明治以降の活字本としても群書類従本が広く流布している」ことを理由にされている。しかしながら、樋口知志氏の諸本研究（前掲書、第三部第一章）によって注目された、寛永三年（一六二六）書写奥書を有す狩野文庫本（漢字片仮名交じり）の存

在は問題であろう。樋口氏は「御家流祖尊円親王筆になる第一巻と、尊円筆の伝承があった序文とが同一人の所有に帰することがあったために、近世初頭頃にそれらの内容を併せもった写本が存在していた」可能性を推している。私も個人的に狩野文庫本を調査したが、東博本と近世版本二書の中間的とも言える異同を認めるので、校合・分析の対象に加える必要を感じている。

学会等でお会いする著者・野中哲照氏は穏やかな人物である。一方、論考の筆致から窺われるように、研究対象に向き合う姿勢は常に情熱的である。口頭発表を拝聴された方ならばご存じだろうが、準備する資料の分量と工夫、その熱い口吻は聴く者を圧倒する。学界的に野中氏の研究を「様子見」していたのは、同じ情熱をもって『後三年記』と向き合えていなかったからかも知れない。本稿もまた情熱的に評し得たとは思えないが、いくつかの問題点を提起した以上、野中氏に劣らぬ情熱を以て自分なりの答えを用意しなければならぬ。結果、宿題を増やすことになったが、この機会を与えて下さったことに感謝したい。同時に、両書を繙かれ『後三年記』について熱く議論する方々が続くことを切に願う。

（『後三年記の成立』二〇一四年一月 汲古書院 A5判 三七頁 本体一〇〇〇〇円／『後三年記詳註』二〇一五年二月 汲古書院 A5判 四八八頁 本体二二〇〇〇円）